

[普及事項]

成果情報名：ハタネズミはダイファシノン粒剤をよく摂食する

研究機関名 果樹試験場 生産技術部

担当者 高橋 功

[要約]

果樹園に生息する野そは3種類が確認され、9割以上がハタネズミである。捕獲したハタネズミに対し、現在、野そ対策として使用されているダイファシノン粒剤（商品名ヤソヂオン）を与えるとよく摂食し、20g程度の連続投与で90%以上が死亡する。

[キーワード]

ハタネズミ・ダイファシノン粒剤・ヤソヂオン・致死量

[普及対象範囲]

県内果樹産地全域

[ねらい]

果樹園の野そ被害は、積雪期間が長い県南部を中心に恒常化しており、捕獲や殺そ剤による密度低減を指導している。しかし、殺そ剤はそ穴への投入が主体で、摂食の有無が確認できないため、効果に疑念を抱く生産者も少なくない。そこで、1985年度から「秋田県農作物病害虫・雑草防除基準」に採用されているダイファシノン粒剤（以下、ヤソヂオン）のハタネズミに対する効果を検証する。

[成果の内容及び特徴]

- 1 野その被害が多い場内の圃場からは、ハタネズミ、ドブネズミ、アカネズミの3種が捕獲され、捕獲数はハタネズミが全体の96%を占める（図1）。
- 2 果樹園で捕獲したハタネズミは、果実とヤソヂオンを与えると、いずれもよく摂食する。
- 3 ハタネズミのヤソヂオンに対する感受性には個体差があるが、一回に4.5～9.2g（製剤で約50粒～100粒）を摂食すると、約50%が死亡する（図2）。
- 4 10日程度の間隔があいても、2～3回連続で合計11.9～18.3g（製剤で130～200粒）まで摂食すると、死亡率は90%以上になる（図2）。

[成果の活用上の留意点]

- 1 ヤソヂオンは整形の立方体で、1粒が約0.09gである。市販品には5g（約55粒）入りの小袋の他に「果樹仕様」として10g入り（約110粒）小袋があり、試験結果から「果樹仕様」を利用した方が効率的である（図3）。
- 2 現在、数多く散在するそ穴に対し、小袋を一つずつ投入する方法が一般的であるが、標的とするそ穴を限定し、粒剤を投入後にリンゴ箱を被せる方法が省力的かつ効率的である（図4）。さらに、仕掛けた粒剤や果実などの摂食状況を観察し、粒剤の追加や果実などの交換、または設置場所を移動することで、無駄な処理をなくすることができる（図5）。

[具体的なデータ等]

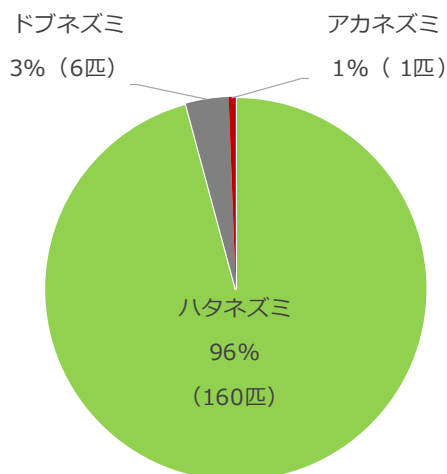


図1 果樹園で捕獲される野その種類



図3 ダイファシノン粒剤「ヤソデオン」500g

左：一般品（5g小袋×100包入り）
右：果樹仕様（10g小袋×50包入り）

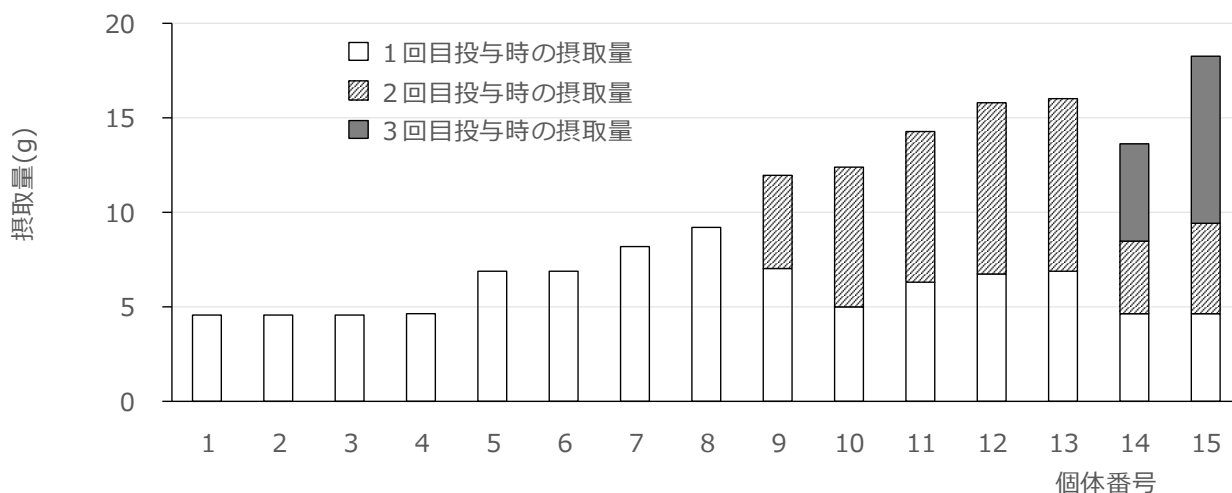


図2 ダイファシノン粒剤の投与で死亡したハタネズミの摂取量（16匹供試で、15匹死亡）

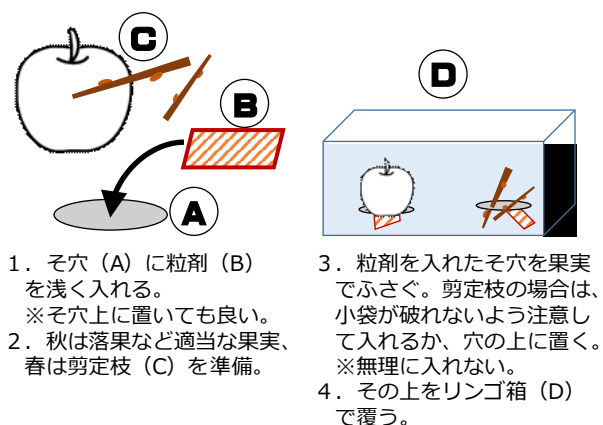


図4 ダイファシノン粒剤の設置例



図5 そ穴上に被せたリンゴの摂食状況
※薬剤や果実の摂食がなくなるまで図4の対策を継続すると良い

[その他]

研究課題名：積雪地帯の果樹園におけるハタネズミの防除対策

研究期間：平成30年度～令和元年度

予算区分：その他

掲載誌等：東北農業研究第74号(2021)